リレーエッセイ

ハードルを越えて 34

南（みなみ） 克司（かつし）さん
（霧島市隼人町）

高校を卒業後、県の職員として横川警察署内の会計の部署で働き始めましたが、デスクワークが苦手ということと外回りをする警察官への憧れもあって、当時、鹿児島市の坂元にあった警察学校に入学しました。

新任地の出水警察署、そして名瀬警察署、1974年からは鹿児島空港内で勤務しました。名瀬で長男が生まれた頃、流行性角結膜炎を患いましたがなかなか治癒せず、鹿児島市内の病院に入院することになりました。退院後は復職したのですが、29歳のときに再入院し、それからは入退院の繰り返しでした。先のことを考えて、家族を養うためにも、手に職をつけなければならないという強い思いから、1980年に鹿児島市にある県立盲学校に入学しました。家族で学校の傍へ引っ越してからは、鍼灸師の資格取得に向けて、点字と専門教科の猛勉強の日々でした。あんま、マッサージ、指圧、鍼、灸の国家試験に合格し、無事卒業できたときの喜びは今でも忘れられません。

1983年5月に「南鍼灸治療院」を開業してから10年後、もっと腕を磨きたいと一念発起して、姶良市にある整形外科で学び直しました。通院はずっと続けていたのですが、1996年8月に眼底出血を起こし全盲に。全盲になった時の方が辛いように思われるかもしれませんが、自分としては29歳の再入院の時の方が、見えなくなる恐怖や不安から辛かったです。全盲になっても仕事はあったし、なったものは仕方がないとあきらめもつきました。後ろを振り返れば悔やむことも多いので、常に前向きでありたい、といつも考えています。思えば、資格取得もその日のための準備だったのかもしれません。そして、何より周りの支えがここまで導いてくれたと思っています。

先日姶良市の作文コンクールで、孫の陽菜(はるな)が「私の祖父」というタイトルで最優秀賞をもらいました。いつも傍で私の目の役割を果たしてくれているだけに、喜びもひとしおでした。妻と長男が看護師、次男が作業療法士という職業に就いたのも、私のことを考えての選択だったのでしょう。そんな家族に囲まれているからこそ、幸せな人生を送れていると感謝しています。今は妻と菜園を手入れするほか、CDで時代小説を聴いたり、孫たちと一緒に居酒屋に行ったりすることが楽しみです。あんまは力仕事ですが、年齢に関係なく続けられる仕事ですので、まだまだ現役で働きたいと考えています。

治療院の中では、テキパキと動き回り施術をする南さん。その様子は、目の不自由さを全く感じさせないほど

盲学校時代に開催された全国障害者スポーツ大会（びわこ大会）では、水泳で金、陸上（短距離音競争）で銀メダルを獲得しました

南鍼灸治療院
霧島市隼人町小浜207-2
TEL 0995-43-3312